

巻頭写真 縄文時代早期の千葉県館山市沖ノ島遺跡

Okinoshima site of the earliest Jomon period, Tateyama city, Chiba Prefecture

沖ノ島遺跡は、房総半島の南端に近い、館山湾南部の沖ノ島の海岸部に位置する縄文時代早期の遺跡である。沖ノ島は「島」と呼ばれてはいるが、房総半島とは砂州でつながっている（写真1）。沖ノ島遺跡は、通常、海面下に沈んでいて干潮時に出現するという特徴がある（写真2）。1987年に三瓶雅延氏が海辺で縄文時代の土器を採取したことで遺跡の存在が示唆されていたが、遺跡が海面下に沈んでいたため発見できず、当時は遺物が流れ込んだものだと考えられた。2002年に千葉大学考古学研究室で予備調査を行ったところ、遺跡の存在が明らかになり、2003年から2005年にかけて本格的な調査が行われた（千葉大学考古学研究室，2004，2006）。

沖ノ島遺跡は水面下に沈んでいるため、発掘調査は春と秋の大潮の時期に行われた。発掘時は海水が入ってこないように、調査区の周りを土嚢で囲み、ポンプで水をかき出しながら引き潮時の数時間のみ発掘が行われた（写真3，4）。潮が満ちてくると水没してしまうため、毎日、この作業が繰り返された。

沖ノ島遺跡からは、縄文時代早期のものとする土器のほかに、動物遺体や植物遺体などの自然遺物が非常に多く見ついている。動物遺体では、イルカの骨が多量に出土し、哺乳類遺体の9割を占めている。そのほか、陸棲哺乳類のイノシシの骨も出土している。魚類ではマダイやクロダイ属、イシダイ属、スズキ属、など内湾性の種が出土した。貝類ではカキ類やサザエなど潮間帯から岩礁にかけてみられる種が出土した。イルカの骨が、ほかの動物遺体に比べて圧倒的に多く、骨に人為的な痕跡が見られたことから、イルカの捕獲・解体の場であったと考えられている（千葉大学考古学研究室，2006）。

土器や動物遺体は泥質砂層（岡崎ほか，2006のUnit II）に最も多く含まれていた（写真5）。ここからは、アサやヤブツバキ属などの種実類や葉、木材が、遺物洗い出し時に出土した（小林ほか，2008a，2008b）。泥質砂層は、ラミナの発達したシルトと砂の互層（岡崎ほか，2006のUnit IIIの最下部）に覆われる。この層の最下部には、タブノキの葉の密集層が含まれており、そこには大量の保存状態の良いタブノキの花や、モチノキの核、ヤブツバキの果実・種子が見つかった（写真6）。この木の葉密集層の樹木花粉には、アカガシ亜属が最も高率で含まれていた（百原ほか，2006）。このほか、木の葉層からはアオオサムシなどの昆虫の羽なども見ついている（百原ほか，2006）。さらに、上位の地層は、



写真1 沖ノ島遠景。島の中央の白く見えている部分が調査地。



写真2 干潮時の発掘調査風景。調査地に海水が入ってこないように周りを土嚢で囲んでいる。



写真3 打ち寄せる波と土嚢。汀線ぎりぎりに土嚢を積んで調査している。

軽石粒を多く含む斜行葉理の発達した分級のよい細粒～中粒砂層へと漸移する(写真5)。これらの地層は、堆積相が漸移することや顕著な浸食面が見られないことから、比較的短期間に堆積した一連のイベント堆積物の可能性が高いとされている(岡崎ほか, 2006)。

沖ノ島遺跡は、海岸部の人々の生活や古環境を明らかにするための情報を得ることができる貴重な遺跡であり、縄文時代早期の遺跡の中でも特に重要な遺跡の1つであろう。

引用文献

千葉大学文学部考古学研究室, 2004. 千葉県館山市沖ノ島遺跡 第1次発掘調査概報, 33 pp. 千葉大学考古学研究室, 千葉.

千葉大学文学部考古学研究室, 2006. 千葉県館山市沖ノ島遺跡 第2・3次発掘調査概報, 45 pp. 千葉大学考古学研究室, 千葉.

小林真生子・百原 新・清永丈太・岡崎浩子・能城修一・柳澤清一・岡本東三, 2008a, 房総半島南部の約8700年前の大型植物化石群から推定される照葉樹林のレフュージア, 第55回日本生態学会講演要旨集, 343.

小林真生子・百原 新・沖津 進・柳澤清一・岡本東三, 2008b, 千葉県沖ノ島遺跡から出土した縄文時代早期のアサ果実, 植生史研究 16: 11-18.

百原 新・小林真生子・林 成多・清永丈太・岡崎浩子, 2006. IV 古環境分析, 「千葉県館山市沖ノ島遺跡第2・3次発掘調査概報」(千葉大学考古学研究室編), 31-36. 千葉大学考古学研究室, 千葉市.

岡崎浩子・百原 新・小林真生子・柳澤清一・岡本東三, 2006. 房総半島南端館山市沖ノ島遺跡のイベント堆積物, 月刊地球 28: 572-576.

(小林真生子・百原 新・柳澤清一・岡本東三 Makiko Kobayashi, Arata Momohara, Seiichi Yanagisawa, Tozo Okamoto)



写真4 土嚢の内側の調査風景。海水の侵入を避けるために、土嚢は海の方から二重に積まれている。



写真5 トレンチD1区西壁の露頭。下位より泥質砂層(Unit IIの9a層, 厚さ約10 cm), ラミナの発達したシルトと砂の互層(Unit III最下部, 厚さ約20~30 cm, この層の最下部に木の葉密集層が見える)。その上は、斜行葉理の発達した分級のよい細粒～中粒砂層。



写真6 写真5の木の葉密集層(Unit III最下部)の拡大写真。タブノキの葉が密集する。